

# 知的障害がある子どもの母親の自己受容に母親の家族認知が及ぼす影響

鞍田奈緒美<sup>1)</sup>・阿部美穂子

The influence of mother's family cognition on self-acceptance of the mothers of children with intellectual disabilities

Naomi KURATA・Mihoko ABE

本研究では、自己受容を「ありのままの自分をそのまま受け入れること」と定義し、それに基づき、以下の2点を目的として調査研究を行った。まず1点目は、子どもに知的障害があるかないかが母親の自己受容に差を及ぼすか明らかにすることである。調査の結果、子どもに知的障害があるかないかが母親の自己受容得点に有意差を及ぼさないことが明らかとなった。2点目に、母親の家族認知に着目し、母親の自己受容の影響因を検討することである。その結果、知的障害がある子どもの母親の自己受容は、「母親の就業の有無」や、「家族が話を聞いてくれることへの認識」によって影響を受けるが、それにもまして「意思決定における個々の尊重」「家族単位としての活動における凝集性」といった母親の家族認知が影響を及ぼしていた。以上のことから、知的障害がある子どもの母親が、障害がある子どもの子育てという困難な状況にあつてなお、知的障害がある子どもはいない母親と変わらない自己受容得点を示し、そこには母親の家族認知が影響を及ぼしていることが明らかになった。

キーワード：知的障害、母親、自己受容、家族認知

Key words : Intellectual Disabilities, Mothers, Self-acceptance, Family Cognition

## 問題と目的

障害がある子どもの母親を対象とした研究には、障害受容過程やストレスに関するものが多く、障害がある子どもを養育していない母親よりも子育てにおけるストレスが有意に高いことが示されている。ではストレスが高い子育てに取り組む母親の気持ちを支えているものは何であろうか。母親の心理的な状態像を捉えるにあたり、子どもの障害やそれに伴う子育てストレスといったマイナスの部分ではなく、彼女たちが自分自身をどう受けとめているかについて知りたいと考え、心理的健康の指標の1つに数えられている自己受容(板津, 1996)に注目し、検討することとした。

母親の自己受容に関する研究は多くないが、母親が、母親としての役割を果たす上で子ども受容や養育態度との関連を検討した研究(森元・鈴木・丹治・山口, 1999; 江口, 1987)がある。そこでは、母親の自己受容が、子ども受容や適切な養育態度に影響を及ぼす

ことが明らかにされている。

森元と江口の研究は母親の自己受容を、母親としての役割を果たすこと(子ども受容や養育態度)の条件として扱ったものであるが、次に紹介する研究は母親の自己受容そのものの状態を扱い、関連する要因の分析を行っている。

西永・奥住・清水(2002)は、Nishinaga, Okuzumi, and Shimizu(2001)を引用し、知的障害がある子どもの母親とそうではない母親(以下、母親一般)の自己受容の違いを、自己受容尺度(西永, 2001)を用いて判別分析による検討を行った結果、幸福感や日常生活の満足感に関する項目において母親一般よりも自己受容の程度が低いこと、失敗への不安については母親一般よりも自己受容の程度が高いことを示した。しかし、その上でなお、それ以外の項目において知的障害がある子どもの母親と母親一般を判別できる統計的に有意な項目は見出せなかったとした。

また、西永ら(2001)は、障害がある子どもの母

1) 富山県立しらとり支援学校教諭

親の自己受容に関連する要因の分析を行った。その結果、知的障害がある子どもを育てる年数が母親自身の自己受容の程度を上昇させる要因になることが示唆された。更に下位因子において「精神的自己」では母親の年齢、「母親役割・対人的自己」では長子の年齢が高い程、自己受容の程度が高まることが示唆された。これらの結果から、西永ら（2001）は、障害がある子どもの母親の自己受容の程度は、時間とともに高まることが示されたが、他の下位因子では、統計的に有意である要因は得られず、障害がある子どもの母親の自己受容に影響する要因分析の必要性が課題として残されたとしている。西永ら（2002）は、知的障害がある子どもの母親の自己受容に関連する研究はごく少なく、母親の自己受容に影響する要因が他にも存在するのかどうか、今後の検討を継続する必要があるとしている。

これらの先行研究より、知的障害がある子どもの母親と母親一般の自己受容に差があるかどうかについては、明確な結論は得られていないと考える。また、知的障害がある子どもの母親の自己受容に影響を及ぼす要因については検討の継続が必要であることが分かった。そこで、本研究では、知的障害がある子どもの母親の自己受容について、西永らの研究を踏まえ、新たな観点から検討することとする。

その観点の1つは、自己受容の定義である。西永ら（2001）は、「現実自己と理想自己の差異」として尺度を作成し調査したが、本研究では「ありのままの自分をそのまま受け入れること」として母親の自己受容の実態を調べる。なぜなら、知的障害がある子どもの母親であるという事実は、理想自己という視点からは受け入れ難いものであったとしても、そのことも踏まえて現実自己について「それでよし、それでかまわない」という受容、すなわち「現実自己と理想自己の差は大きいけれどもかまわない」という受容があると考えるからである。この自己受容観に基づいて、子どもに知的障害があることが母親の自己受容に差を及ぼすかどうかを確認する。

もう1つは、母親の家族機能に対する認知（家族認知）という観点を取り入れて、知的障害がある子どもの母親の自己受容に影響を及ぼす要因を検討することである。子育てをする母親にとって最も身近に存在する家族を母親がどう認識しているかということは、母親の自己受容に影響を及ぼすと考える。合わせて、その他の母親の属性（年齢、就業の有無等）が及ぼす影響についても検討する。

## 方法

### 1. 実施時期・調査対象・実施方法

2010年2月下旬から3月上旬にかけて、富山県内の知的障害がある子どもを対象とする特別支援学校5校の小学部及び中学部在籍児童生徒の母親約450名と、公立小学校1校の全校児童の母親約320名を調査対象とし、各学校の管理職に調査協力依頼をし、担任より児童生徒を通じて家庭に調査用紙を配布、回収した。回答記入は無記名で実施した。そのうち、記入漏れ等の欠損値を含む回答を除き有効回答数393を分析の対象とした。有効回答のうち、知的障害がある子どもを養育する母親（以下、知的障害がある子どもの母親）の回答数は265、知的障害がある子どもを養育していない母親（以下、知的障害がある子どもはいる母親）の回答数は128であった。

### 2. 調査内容

#### (1) フェイスシート

①年齢、②職業の有無、③子育て経験年数、④家族構成、その他「家族の誰かはあなたの話を聞いてくれますか」という質問の回答を求めた。

#### (2) 自己受容について

自己受容測定尺度（沢崎, 1995）の37項目より「性的能力（魅力）」の項目を削除した36項目。各項目について、「それでよい、そのままよい（5点）」「それでまあまあよい、それでかまわない（4点）」「どちらでもない、わからない（3点）」「それでは少しいやだ、少し気になる（2点）」「それでは全くいやだ、気に入らない（1点）」からあてはまるものを選択し、得点化した。

#### (3) 家族認知について

日本語版FACESⅢ（草田・岡堂, 1993）の20項目について、文言上分かりにくい点を、文意を損ねないように書き換えたもの。各項目について「ぴったりあてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらとも言えない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「まったくあてはまらない（1点）」から選択し得点化した。

日本語版FACESⅢは、Olsonが1979年に発表した家族システムの円環モデルに基づいて開発した質問紙FACESⅢ（1985）を草田・岡堂が和訳したもので、家族機能を「凝集性」と「適応性」の2次元から測定するものである。

表1 母親の自己受容度 因子分析の結果  
(プロマックス回転後)

No.質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
第1因子:「人とかかわりの中で評価する精神的自己因子」 $\alpha = .895$					
20 積極性	.780	.095	-.167	.063	.625
21 協調性	.680	.073	.033	.020	.570
19 明るさ	.633	.022	-.037	.219	.588
26 決断力	.605	.016	-.030	.140	.469
22 情緒安定度	.569	.089	.139	-.018	.497
29 やる気	.565	-.053	-.047	.364	.588
24 指導力	.540	.055	-.066	.119	.375
25 のんきさ	.535	-.023	.096	-.030	.315
第2因子:「身体的自己因子」 $\alpha = .868$					
3 体力	.068	.797	-.052	-.196	.528
8 運動能力	.113	.742	-.125	-.045	.505
6 体つき	-.095	.713	-.021	.051	.453
9 服装	-.020	.629	-.073	.261	.528
7 知性(学力)	-.081	.589	.127	.224	.587
5 顔立ち	-.028	.582	.069	.250	.586
4 健康状態	.197	.560	.086	-.271	.420
第3因子:「社会的自己因子」 $\alpha = .839$					
12 家族	.026	-.133	.819	-.107	.503
13 住居	-.048	-.107	.696	.055	.396
11 経済状態	-.212	.145	.574	.230	.493
16 社会的地位(立場)	.032	.158	.523	.090	.502
14 人間関係	-.398	.123	.510	-.196	.632
10 職業	-.035	.079	.498	.180	.407
第4因子:「家族の中で評価する精神的自己因子」 $\alpha = .875$					
27 思いやり	.364	-.132	-.041	.665	.686
17 やさしさ	.150	.032	.024	.657	.607
28 責任感	.400	-.134	.076	.515	.601
18 まじめさ	.285	-.045	.070	.509	.518
負荷量平方和	7.543	7.015	6.198	5.739	
寄与率(累積寄与率)(%)	38.033	7.294	3.617	2.968	51.911

## 結果

### 1. 母親の自己受容について

#### (1) 母親の自己受容の構造

主因子法、プロマックス回転により因子分析を行い、因子負荷量が0.49に満たない11項目を削除し、25項目から4つの因子を抽出した(表1)。

第1因子に負荷量の高い項目は「積極性」「協調性」「明るさ」「決断力」「情緒安定度」「やる気」「指導力」「のんきさ」であり、第4因子に負荷量の高い項目は「思いやり」「やさしさ」「責任感」「まじめさ」であった。これらは沢崎の5領域では同じ「精神的自己」に含まれる項目であるが、第1因子は外に向かって働く力を他人と比べた自己評価であると解釈され、「人とかかわりの中で評価する精神的自己」因子(以下JF1とする)と命名された。第4因子は内省的で母親が家族に対して自己評価するものと解釈され、「家族の中で評価する精神的自己」因子(以下JF4とする)と命名された。第2因子に負荷量の高い項目は「知性(学力)」

表2 知的障害がある子の母と知的障害がある子はいない母の自己受容総得点の平均値の比較

	N	平均値	標準偏差	等分散性のLeveneの検定		2つの母平均の差の検定		
				F値	有意確率	t値	自由度	有意確率
知的障害がある子どもの母親	265	117.99	23.715	0.279	0.597	0.512	391	0.609
知的障害がある子ではない母親	128	119.27	22.488					

表3 知的障害がある子の母と知的障害がある子はいない母の自己受容下位尺度得点の平均値の比較

因子名		N	平均値	標準偏差	等分散性のLeveneの検定		2つの母平均の差の検定		
					F値	有意確率	t値	自由度	有意確率
人とかかわりの中で評価する精神的自己	知的障害がある子どもの母親	265	3.260	0.766	1.506	0.221	0.532	391	0.595
	知的障害がある子ではない母親	128	3.303	0.680					
身体的自己	知的障害がある子どもの母親	265	2.981	0.816	0.060	0.807	0.703	391	0.482
	知的障害がある子ではない母親	128	3.042	0.794					
社会的自己	知的障害がある子どもの母親	265	3.389	0.848	0.466	0.495	0.036	391	0.971
	知的障害がある子ではない母親	128	3.392	0.792					
家族の中で評価する精神的自己	知的障害がある子どもの母親	265	3.527	0.770	0.100	0.753	0.000	391	1.000
	知的障害がある子ではない母親	128	3.527	0.735					

(精神的自己)を例外として全て「身体的自己」の項目であり、本研究でもそのまま「身体的自己」因子(以下JF2とする)と命名された。同様に第3因子に負荷量の高い項目は「社会的自己」に含まれる項目であったので、「社会的自己」因子(以下JF3とする)と命名された。

このように母親の自己受容に関する項目は4因子から構成されていた。沢崎の5領域の「精神的自己」がJF1とJF4に分けられたことは、調査対象を母親に限定した特徴であると考えられる。

#### (2) 知的障害がある子どもの母親と知的障害がある子はいない母親との自己受容の比較

知的障害がある子どもの母親と知的障害がある子はいない母親で自己受容総得点の平均値の差の検定を行った結果、有意差は見られなかった(表2)。

同様に、4つの因子毎に該当する質問項目の得点の合計を項目数で割って下位尺度得点を求め、平均値の差の検定を行った結果、どの下位尺度得点にも有意差

は見られなかった(表3)。

結果から、子どもに知的障害があることが母親の自己受容に差を及ぼす要因とはならないと言える。これは、一部の領域において差を見出したNishinaga et al. (2001)の研究結果とは異なるが、それは自己受容の定義が異なることによる影響が大きいと考えられる。本調査では、母親の子どもに知的障害があるという現実に対する認知が肯定的であるか、否定的であるかは確認できないが、母親が今の自分自身を受け入れているかどうかを尋ねた結果として、知的障害がある子どもはいない母親との間で、その自己受容得点に差は認められなかったと言える。

### (3) 知的障害がある子どもの母親の自己受容に影響を及ぼす要因の検討

母親の年齢(母親の年齢の中央値で二分した41歳以下の低年齢群と、42歳以上の高年齢群)、家族構成(核家族群と祖父母との同居家族群)、子育て経験年数(小学校入学後2年までの6~8年群と義務教育を終えた16年以上群)、母親の就業の有無(専業主婦群と何らかの仕事に就いている就業群)、知的障害がある子どもの年齢(小学校入学後2年までの6~8歳群と中学校入学後の13歳以上群)、5つの要因それぞれに2群を設定し、母親の自己受容総得点の平均値の差を検定したところ、母親の就業の有無について、専業主婦群の平均値113.09, SD=22.355、就業群の平均値120.60, SD=24.065 ( $t=2.477$   $df=263$   $p=0.014<0.05$ )となり二つの群間に有意な差がみられた。その他の要因については、有意差は認められなかった。そこで、自己受容の因子毎に母親の就業の有無による下位尺度得点の平均値の差の検定を行った結果、JF1において1%水準で( $t=2.721$   $df=263$   $p=0.007<0.01$ )、JF2において5%水準で( $t=2.307$   $df=205.323$   $p=0.022<0.05$ )有意差がみられた。JF3においては有意傾向がみられ( $t=1.875$   $df=263$   $p=0.062<0.10$ )、JF4については、有意差はみられなかった( $t=1.642$   $df=263$   $p=0.102ns$ )。

また、「家族の誰かはあなたの話を聞いてくれますか?」の回答結果(表4)により、「よく聞いてくれる」群、「まあ聞いてくれる」群、「聞いてくれない」群の3群間で母親の自己受容総得点平均値の差の検定を行った。多重比較(Tukey法)の結果、1%水準で「(母親の話を)よく聞いてくれる」群の得点が「まあ聞いてくれる」群の得点よりも、同じく1%水準で「まあ聞いてくれる」群の得点が「聞いてくれない」群の得点よりも、有意に高かった(表5)。

表4 「家族の誰かはあなたの話を聞いてくれますか」の回答数 N=265

	よく聞いてくれる	まあ聞いてくれる	あまり聞いてくれない	全く聞いてくれない
回答数	88	148	27	2

表5 「家族が話を聞いてくれることへの認識」の3群による母親の自己受容総得点の平均値の比較

家族が聞いてくれるか	N	平均値	標準偏差	F値	有意確率
聞いてくれない	29	108.03	20.200	7.992	0.000
まあ聞いてくれる	148	115.55	24.237		
よく聞いてくれる	88	125.36	22.013		
合計	265	117.99	23.715		

Tukey法による多重比較の結果、1%水準でよく聞いてくれる群>まあ聞いてくれる群>聞いてくれない群となった。

## 2. 知的障害がある子どもの母親の家族認知

### (1) 知的障害がある子どもの母親の家族認知の構造

有効回答数393のうち、知的障害がある子どもの母親の回答265を分析対象とする。

日本語版FACESⅢ(草田ら, 1993)を基にした20項目の回答に対し、「ぴったりあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点と配し、主因子法、固有値1の基準で因子抽出後にバリマックス回転を実施し、因子負荷量が0.4に満たなかった1項目(項目14)を削除し、因子分析を行った結果、解釈可能性から5因子を抽出した(表6)。

第1因子に負荷量の高い項目は「家族で何かをする時はみんなでやる」「私の家族は皆でしたいことがすぐに思いつく」「私の家族では自由な時間は家族と一緒に過ごしている」「私の家族はみんなで何かをするのが好きである」「私の家族は家族がまとまっていることをとても大切にしている」「私の家族は叱り方について親と子で話し合う」であった。この因子は、「何かをする」「したいこと」「一緒に過ごす」「まとまっている」等の言葉から、行動や活動における家族のまとまりを表していると解釈された。そこで、この因子は「家族単位としての活動における凝集性」因子(以下FF1とする)と命名された。

第2因子に負荷量の高い項目は「私の家族では問題の解決には子どもの意見も聞いている」「私の家族は子どもの言い分も聞いてしつけをしている」「私の家

表6 知的障害がある子どもの母親の家族認知（バリマックス回転後）

No.	質問項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
<b>第一因子：「家族単位としての活動における凝集性」 <math>\alpha = .860</math></b>							
13	家族で何かをする時はみんなでやる	.666	.177	.314	.215	.187	.655
15	私の家族は皆で一緒にしたいことがすぐに思いつく	.647	.239	.225	.221	.148	.597
9	私の家族では自由な時間は家族と一緒に過ごしている	.597	.052	.143	.363	.114	.525
5	私の家族はみんなで何かをするのが好きである	.547	.270	.154	.401	.133	.575
19	私の家族は家族がまとまっていることをとても大切にしている	.494	.132	.252	.386	.353	.598
10	私の家族は叱り方について親と子で話し合う	.453	.331	.250	.024	.089	.386
<b>第二因子：「意思決定における個々の尊重」 <math>\alpha = .744</math></b>							
2	私の家族では問題の解決には子どもの意見も聞いている	-.017	.798	.168	.143	-.002	.686
4	私の家族は子どもの言い分も聞いてしつけをしている	.222	.630	.256	.133	.081	.535
12	私の家族では子どもが自主的に物事を決めている	.321	.555	-.018	-.012	.025	.412
3	家族はそれぞれの友人を気に入っている	.158	.437	.300	.167	.068	.339
<b>第三因子：「問題解決における柔軟な対応性」 <math>\alpha = .746</math></b>							
8	私の家族では問題の性質に応じてその取り組み方を変えている	.265	.240	.511	.243	.153	.471
16	私の家族では家事・用事は必要に応じて交代する	.346	.084	.507	.021	.126	.400
1	私の家族は困ったとき家族の誰かに助けを求める	.088	.302	.495	.255	.150	.432
6	家族を引っ張って行く者は状況に応じて変わる	.243	.245	.476	.299	-.257	.502
17	私の家族では何かを決める時家族の誰かに相談する	.399	.201	.442	.207	.354	.563
<b>第四因子：「家族相互の親密性」 <math>\alpha = .721</math></b>							
7	私の家族は他人に対してよりも家族同士の方が親しみを感じている	.179	.091	.148	.664	.087	.511
11	私の家族はお互いがとても近い存在であると感じている	.374	.179	.202	.625	.183	.636
<b>第五因子：「家族役割の固定化」 <math>\alpha = .554</math></b>							
18	私の家族ではみんなを引っ張っていく者が決まっている	.212	.002	-.053	.142	.844	.780
20	私の家族では誰がどの家事・用事をするか決まっている	.084	.062	.220	.056	.413	.233
負荷量平方和		2.786	2.124	1.803	1.715	1.409	
寄与率（累積寄与率）（%）		14.7	11.2	9.5	9.0	7.4	51.8

族では子どもが自主的に物事を決めている」「家族はそれぞれの友人を気に入っている」であった。この因子は子どもについて聞いた項目がほとんどであるが、家族成員のそれぞれを尊重していることを表していると解釈された。そこで、この因子は「意思決定における個々の尊重」因子（以下FF2とする）と命名された。

第3因子に負荷量の高い項目は「私の家族では問題の性質に応じてその取り組み方を変えている」「私の家族では家事・用事は必要に応じて交代する」「私の家族は困ったとき家族の誰かに助けを求める」「家族を引っ張って行く者は状況に応じて変わる」「私の家族では何かを決める時家族の誰かに相談する」であった。この因子は何か問題や困ったことがあると、状況に応じた柔軟な対応ができることを表していると解釈された。そこで、この因子は「問題解決における柔軟な対応性」因子（以下FF3とする）と命名された。

第4因子に負荷量の高い項目は「私の家族は他人に対してよりも家族同士の方が親しみを感じている」「私の家族はお互いがとても近い存在であると感じている」であった。この因子は家族同士が親密であると感じていることを表していると解釈された。そこでこの因子は「家族相互の親密性」因子（以下FF4とする）

と命名された。

第5因子に負荷量の高い項目は「私の家族ではみんなを引っ張って行く者が決まっている」「私の家族では誰がどの家事・用事をするか決まっている」であった。この因子は家族の役割が決まっていることを表していると解釈された。そこで、この因子は「家族役割の固定化」因子（以下FF5とする）と命名された。

FF1とFF4のほとんどの項目はFACESⅢでは、凝集性尺度として大きな枠で1つに数えられていたが、母親の自己受容に影響を及ぼす要因として検討するためには、より詳細な構造に分けることが望ましいと考え、本研究では、別の因子として捉えた。FF1の項目は親しさや距離感といった情緒的なつながりではなく、何か行動しようとするときの結束力を表し、FF4はまさに情緒的なつながりを表している。

また、FF2、FF3、FF5に含まれる項目は、FACESⅢでは同じ適応性尺度の項目であったが、本研究では因子を分けて解釈した。FF2は家族のなかでひとりひとりが尊重され、特に子どもの意見や言い分を聞いているということを表している。FF3は家族が役割を交代できることや、状況に応じて変則的な対応ができることを表し、FF5は家族成員に期待される役割が明確に

表7 知的障害がある子どもの母親の自己受容下位尺度得点と家族認知の下位尺度得点の相関関係

	FF1 (家族単位としての凝集性)	FF2 (意思決定における個々の尊重)	FF3 (問題解決における柔軟な対応性)	FF4 (家族相互の親密性)	FF5 (家族役割の固定化)
JF1 (人とのかかわりの中で評価する精神的自己)	0.319**	0.385**	0.305**	0.273**	0.233**
JF2 (身体的自己)	0.282**	0.332**	0.285**	0.169**	0.082
JF3 (社会的自己)	0.462**	0.419**	0.403**	0.315**	0.255**
JF4 (家族の中で評価する精神的自己)	0.218**	0.286**	0.275**	0.250**	0.130**
自己受容総得点	0.410**	0.446**	0.397**	0.320**	0.202**

\*\*p<0.01, \*p<0.05

なっていることを表している。

## (2) 家族の誰かが話を聞いてくれることへの認識は家族認知に影響を及ぼすか

家族が話を聞いてくれるという母親の認識は、母親の自己受容に差を及ぼしていた。では母親の家族認知についてはどうか。3群間で家族認知の下位尺度得点平均値の差の検定を行った。多重比較 (Tukey法) の結果、4つの因子において0.1～5%水準で3群間に有意差があり、家族の誰かが話を聞いてくれることの認識が高い母親は家族認知の下位尺度得点も高くなることがわかった。

しかし、FF5「家族役割の固定化」に関しては、1%水準で「聞いてくれない」群<「まあ聞いてくれる」群であったが、「まあ聞いてくれる」群と「よく聞いてくれる」群では有意差がみられなかった。

## 3. 知的障害がある子どもの母親の自己受容と家族認知

母親の自己受容について、4つの構成因子を確認し、子どもに知的障害があるかないかで母親の自己受容に差はないことや、知的障害がある子どもの母親の自己受容に「母親の就業の有無」「家族が話を聞いてくれることの認識」が影響を及ぼすことが示唆された。また、母親の家族認知について、5つの構成因子を確認した。ここでは、知的障害がある子どもの母親について、母親の自己受容と家族認知の関係について検討する。

表7に知的障害がある子どもの母親の自己受容の下位尺度得点と母親の家族認知の下位尺度得点の相関関係を示す。

JF2とFF5の組み合わせ以外のすべての因子の間に1%水準で有意な相関関係が見られた。

そこで、自己受容の4因子それぞれを基準変数とし、家族認知の5因子に「母親の就業の有無」と「家族が話を聞いてくれることの認識」を加えた7つを説明変

数とする重回帰分析を行った。解析の方法はステップワイズによる変数増減法を用い、変数入れ替えの基準は投入する有意確率 $\leq 0.05$ 、除去する有意確率 $\geq 0.100$ とした。

JF1「人とのかかわりの中で評価する精神的自己」を基準変数とした結果、「FF2」「FF5」「母親の就業の有無」「FF4」からの標準偏回帰係数が有意であった。

同様にJF2「身体的自己」では「FF2」「FF1」が、JF3「社会的自己」では「FF1」「FF2」「家族が話を聞いてくれるかの認識」が、JF4「家族の中で評価する精神的自己」では「FF2」「FF1」からの標準偏回帰係数が有意であった。これらの結果をまとめて表にしたものが表8である。この重回帰分析結果に基づくパス図を図1に示す。

また、自己受容総得点を基準変数とし、7つの変数を説明変数として重回帰分析を行った結果、「母親の就業の有無」や「家族が話を聞いてくれることへの認識」よりも、FF2 ( $\beta=.321$ ,  $p<.001$ ) FF1 ( $\beta=.248$ ,  $p<.001$ ) といった家族認知の因子が有意な標準偏回帰係数を示した (表9)。ただし、 $R^2=.245$ であり、母親の自己受容全体を説明しようとするには、あてはまりがよいとは言えない。

## 考察

### 1. 母親の自己受容について

子どもに知的障害があるかないかで母親の自己受容に差は無いことが明らかになった。子どもに知的障害があることが母親の自己受容を低下させる要因にはならないと考えられる。

このことは、一部の項目において知的障害がある子どもの母親と母親一般との間に差があることを示した西永らの研究とは異なる結果である。

本研究では母親の自己受容の定義を「ありのままの自分をそのまま受け入れること」とし、現実自己に対する自己認知を問わない沢崎の自己受容測定尺度を使用した。自分のある属性に対しての認知が肯定的であれば、否定的であれば、その属性に対して受容がされているかどうか直接問われる。

知的障害がある子どもの母親が、現実自己に否定的か肯定的かという確認はここではできないが、現実自己の認知が否定的、肯定的のどちらであろうと、そのありのままを受け入れているという意味で、知的障害がある子どもの母親と、知的障害がある子どもはいない母親との間で自己受容に差は認められないというこ

とが分かった。

## 2. 知的障害がある子どもの母親の自己受容の影響因

重回帰分析の結果、t検定や分散分析で母親の自己受容に有意差が確認された「母親の就業の有無」や「家族が話を聞いてくれることへの認識」よりも、FF2、FF1といった家族認知の因子が、有意な標準偏回帰係数を示した。FF2は「意思決定における個々の尊重」であり、FF1は「家族単位としての活動における凝集性」である。

FF2「意思決定における個々の尊重」は、家族の中で子どもの意思が尊重されているということであり、それは母親の力によるところが大きいと思われる。そのことが上手くいっているということが、母親の有能感を満たし、自己受容に影響を及ぼすのであろう。

FF2とともにOlsonのモデルでは適応性に含まれるFF3、FF5であるがFF3は母親の自己受容に影響を及ぼさず、FF5はJF1のみに影響を及ぼしていた。家族の役割や決まりを変える必要に迫られる状況とは、なにか困ったことや問題が起きて、日常ではない状況であると考えられる。ということは、非常時に対処できる可能性がある（FF3）ということよりも、日常において役割がしっかり決まっていること（FF5）の方が、母親の自己受容に影響力が大きいということが言える。

FF1「家族単位としての活動における凝集性」は文字通り、何かをなそうとするときの家族の結束力を表している。家族がまとまって何かをやり遂げられるという家族全体の力を認識できることが母親の自己受容に影響を及ぼすということである。

FF1が家族の活動における凝集性を表すのに対し、FF4は、家族の情緒的なつながり、平易な言い方をすれば、家族の仲の良さを表している。OlsonのモデルではFF1とともに凝集性の尺度に含まれるFF4は、自己受容総得点に有意な標準偏回帰係数を示さなかった。FF1の「活動における凝集性」と分けて検討した結果、FF1は母親の自己受容に影響を及ぼすが、FF4はそれほど影響を及ぼさないということが分かった。凝集性という1つの次元で考えたなら、この違いは分からなかったであろう。

母親の家族認知のうち、FF2「意思決定における個々の尊重」とFF1「家族単位としての活動における凝集性」が、FF3「問題解決における柔軟な対応性」やFF4「家族相互の親密性」やFF5「家族役割の固定化」よりも母親の自己受容に影響を及ぼすことが明らかになった。

表8 重回帰分析から得られた結果のまとめ

基準変数	係数が有意であった変数			
JF1「人とかかわりの中で評価する精神的自己」	FF2	FF5	母親の就業の有無	FF4
JF2「身体的自己」	FF2	FF1		
JF3「社会的自己」	FF1	FF2	家族が話を聞いてくれるかの認識	
JF4「家族の中で評価する精神的自己」	FF2	FF1		

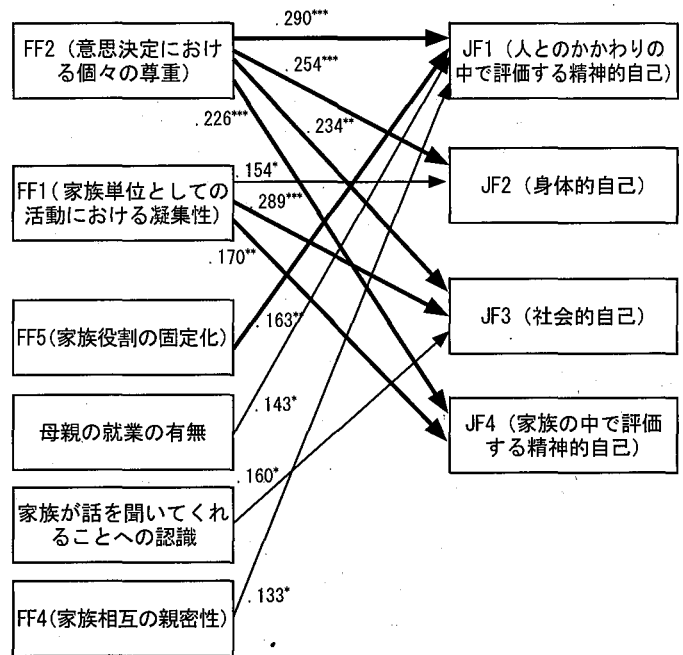


図1 「母親の家族認知、母親の就業の有無、家族が話を聞いてくれること→母親の自己受容」の重回帰分析の結果

注：数字はパス係数を示す。  
太線はパス係数が $p < 0.01$ で有意であることを示す。細線はパス係数が $p < 0.05$ で有意であることを示す。

表9 自己受容総得点に対する重回帰分析の結果

変数	標準化係数
FF2「意思決定における個々の尊重」	0.321***
FF1「家族相互の親密性」	0.248***
$R^2$	0.245***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 総合考察

分析結果より2つの結論が得られた。第一の結論として、子どもに知的障害があるかないかで母親の自己受容に差は無いこと。第二に知的障害がある子どもの母親の自己受容は、「母親の就業の有無」や、「家族が話を聞いてくれることへの認識」によって影響を受け

るが、それにもまして「意思決定における個々の尊重」と「家族単位としての活動における凝集性」といった母親の家族認知が影響を及ぼすということである。

障害がある子どもの子育てはストレスが高いことが先行研究で明らかにされており、知的障害がある子どもの母親と母親一般では、現実自己の認知に差が及ぶであろうことは想像に難くない。しかし、本研究では現実自己への客観的な評価は問わず、現実はどうであろうと自分はそれでよい、そのまま構わないという主観的な自己受容の在り方を調査した結果、知的障害がある子どもの母親と知的障害がある子どもはいない母親との間に差はないという結果になった。

また、西永ら（2001）は、知的障害がある子どもの母親の自己受容について、障害がある子どもの年齢すなわち障害がある子どもを育てている母親の経験年数が、母親の自己受容の程度を上昇させる要因になることや、自己受容の下位因子においては、母親の年齢や長子の年齢が高くなれば自己受容の程度が高まる因子があることを示した。しかし本研究では、知的障害がある子どもの母親の自己受容について、知的障害がある子どもの年齢による統計的に有意な差は見られず、母親の年齢や子育て経験年数によっても同様であった。

知的障害がある子どもの母親が、障害がある子どもの子育てという困難な状況にあってなお、知的障害がある子どもはいない母親と同じ自己受容の状態にあるという結果は、知的障害がある子どもの母親を支援する立場の者として、母親に敬意を表すべき結果である。

一方、知的障害がある子どもの母親の自己受容には母親の家族認知が影響していた。知的障害がある子どもの家族であるからこそ、家族の意思決定において個々の意思を尊重することや、家族で活動する際の結束力の強さが求められ、現実として家族の機能が高められているのである。そして、そのことが結果的に母親の自己受容を支えているものと考えられる。

## 問題点と今後の課題

本研究において、知的障害がある子どもの母親の自己受容に母親の就業の有無や家族が話を聞いてくれることへの認識、それ以上に、個々の尊重や活動における凝集性といった母親の家族認知が自己受容に影響を

及ぼすことが明らかになった。しかしながら、母親の自己受容全体を説明するモデルを想定するならば、本研究における調査によって得られた変数だけでは十分とは言えず、母親の自己受容の影響因については、今後も検討を継続する必要がある。

知的障害がある子どもの母親が自己受容の低い状態に陥り、そのことが子育てにおいてマイナスの影響を与えている場合に、教師という立場でどのようなサポートができるであろうか。本研究で得られた結果に基づいて考えてみる。家族内での個々の尊重と、母親自身が家族に認められる体験は、間接的ではあるが、教師が子どもの成長を母親のかかわりとともに認め、称賛することによって、感じとることができるであろう。また、家族揃って一緒に体験し、家族が結束してやり遂げる経験を共有することによって、母親の家族認知を高め、自己受容も高めることができるのではないか。学校行事、PTA行事への家族での参加を呼び掛けることも有効であると思われる。母親の自己受容が子育てに影響を与えることは先行研究で明らかとなっている。今後、子どもの背景にいる母親や家族を視野に置いた実践的な研究が望まれる。

## 引用・参考文献

- 江口昇勇（1987）障害幼児を持つ母親の研究—自己受容とカウンセリングをめぐる— 同朋大学論叢, 57, 154-131.
- 板津裕己（1996）自己受容性とももの知覚の関わりについて. 駒沢社会学研究, 28, 31-41.
- 草田寿子（1995）日本語版FACESⅢの信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 28, 154-162.
- 森元真紀子・鈴木薫・丹治礼・山口茂嘉（1999）子育て支援の基礎的研究—母親の自己受容と子ども受容などとの関連について— 日本保育学会大会研究論文集, 52, 920-921.
- 西永 堅（2001）知的障害がある子どもの母親の自己受容に関する研究 —母親一般の自己受容との比較から— 東京学芸大学大学院 修士論文
- 西永 堅・奥住秀之・清水直治（2002）知的障害がある子どもの母親の自己受容—文献研究と今後の課題についての検討— 特殊教育研究施設研究報告, 1, 13-20.